

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

「祭礼文化圏」の継承に関する一試論：  
愛媛県宇和島地方の牛鬼行事を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 筒井, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000994">https://doi.org/10.57529/0002000994</a>

## 「祭礼文化圏」の継承に関する一試論

——愛媛県宇和島地方の牛鬼行事を事例として——

筒井 裕

### 一 はじめに

平成期の日本には約八万もの神社が存在し、これらは現在も多様な祭礼を継承している。しかしながら、都市の空  
洞化、少子高齢化、過疎化などの社会現象が進展する現代日本においては、地域人口の多寡を問わず、多くの人的資  
源を要する祭礼は「人手不足」という問題に直面している。一九八〇年代以降、祭礼研究の分野ではこの問題に関す  
る研究が多数著されるようになった。

都市祭礼における人的資源の確保という観点から考察を行った主要な研究として、松平誠による一連の論考を挙げ  
ることができるであろう。松平は、女性や他地域の住民（神輿同好会などの組織を含む）が神田明神の神輿渡御に参  
加するようになった社会的背景を明らかにした。また、田村ほか（二〇〇四、博多祇園山笠）・吉田（二〇一〇、岸  
和田だんじり祭り）は、都市の住民が山車の曳き手を確保すべく他地域から人的資源を集め、行事の存続を図ってい

ることを明確にした。最近では、神田大祭を事例とした清水（二〇一二）が、地元の町会とその支援団体―すなわち他地域の住民からなる神輿同好会―との間にいかなる社会的関係性がみられるかについて、現地調査の成果をもとに報告を行っている。

これに対し、深刻な過疎化に悩む限界集落に焦点を当てた研究もなされている。限界集落における伝統芸能の継承を研究テーマとした星野（二〇〇九）は、限界集落が地元の児童生徒・女性・出身者、あるいは「第三者」（大学の研究グループ・和太鼓集団など）を新たな人的資源として活用することにより、かろうじて伝統芸能を継承し得ているという現状を浮き彫りにした。戸島（二〇〇六）は、宮崎県椎葉村の限界集落の人々が、都市部に転出した男性から協力を得て椎葉神楽の存続を図っていることを報告した。島嶼部に関しては藤岡和佳の興味深い論考がある。藤岡（二〇〇〇）によると、竹富島では地域社会への貢献度の高い移住者に対し、閉鎖的な祭礼への参加を容認しており、これが祭礼に必要な人手の供給源になっているのだという。

以上の研究成果から、日本社会は都市・限界集落のいずれにおいても、地元の女性・児童生徒・出身者を含む「あらゆる属性の地縁者」や、神輿同好会などの支援団体・転入者といった「第三者」を人的資源として活用しなければ、祭礼を成立させることが困難な状態にあることが明白になった。これらの研究の主眼は、地域社会が特定の祭礼や伝統芸能を継承すべく、いかにして人的資源を獲得してきたかについて解明することに置かれてきた。したがって既往の祭礼研究においては、地域社会が、祭礼の成立にとって「人的資源」と同程度に不可欠な要素となっている「祭礼道具」をどのようにして確保してきたかや、自らが属する特定の「祭礼文化圏」をいかにして維持してきたかという点に関して考察を十分に深めることはなかったと言えよう<sup>1)</sup>。

本研究では上記の点をふまえ、周辺地域と人的資源・祭礼道具の供給関係を構築することにより、ある「祭礼文化

圏」の維持を促しているひとつの農村集落―愛媛県宇和島市保田集落―に注目し、現地調査の成果をもとに同集落の活動の概要について報告を行う<sup>(2)</sup>。さらに本稿では、保田集落の事例を参考として、地域社会が「祭礼文化圏」を継承するためのモデルの構築を試みるとともに、これを現実社会に適用させた場合に生じるであろう問題について述べる。以上の点について論じるに先立ち、次章では研究対象地域である愛媛県宇和島地方の祭礼文化の地域的特性とその現況を概観することとしよう。

## 二 愛媛県宇和島地方の祭礼文化の地域的特性とその現況

愛媛県の祭礼文化の概要については、大本敬久が既に論考を著している。大本(二〇〇五)<sup>(3)</sup>によると、愛媛県では中予地方を除いた一帯―すなわち、東予・南予地方―において、山車行事が極めて盛んだという。また筒井(二〇一二)をみると、宇和島地方(南予)は日本の中でもつくりものの山車を用いる祭礼が最も密に分布する地域のひとつであることがわかる。宇和島地方の人々は、氏子集落ごとに「牛鬼」と呼ばれるつくりものの山車を作製し、祭礼時にはこれを大勢で担ぎ、宮入りを果たす「牛鬼行事」を伝承してきた(写真1)。図1は、愛媛県歴史文化博物館編(二〇〇〇)をもとに、愛媛県における牛鬼行事(九八件)の分布を示したものである。同図から牛鬼行事が宇和島地方一帯で行われていることが看取される。よって、牛鬼行事は宇和島地方を中心に、ひとつの祭礼文化圏―いわば「牛鬼文化圏」―を形成していると言えよう。

「牛鬼」とは、いかなる形態の山車であるのか。大本(二〇〇五)は牛鬼の形態について、「顔は牛とも鬼ともつかない形相で、胴体は牛を、尻尾は剣をかたどった練物の一種」だと述べている。牛鬼は頸部と胴体(ドンガラ)のふ



写真2 宇和島市九島地区の牛鬼の構造 (2010年、筆者撮影)  
島嶼部の牛鬼である。小さなサイズの牛鬼だが、本土側のもとの同一の構造をもつ。



写真1 宇和島市保田集落の牛鬼 (2010年、筆者撮影)  
保田集落の牛鬼は非常に寸法が大きく(ドンガラ縦6.3m×横3.2m×高さ2.4m)、その重量は320kgにも達する。

たつの部位からなり、通常、次の工程で組み立てられる。まず、タケや木材を用いて大きなザル状の胴体を作る(写真2)<sup>⑤</sup>。次に、細長い木材の一端に「カブ」と呼ばれる牛鬼の顔を、もう一方の先端部分に短い木材を垂直に据え、頸部を完成させる。そして、これをドンガラの前方部分に差しこむ(写真2参照)<sup>⑥</sup>。最後に、牛鬼の頸部と胴体の周囲を布やシユロの樹皮で覆い、牛鬼の臀部に「祓い」を象徴するとされる幣と剣を飾る。宇和島地方の牛鬼の大部分は、上記のような構造をもつ。したがって、同地域では牛鬼の構造に関する地域的差異はほとんど認められない。ただし、牛鬼は伝統的に氏子集落単位で作製されてきたために、これらの体型・表情・布の色・性別などは各集落で異なる。たとえば、日吉村(現

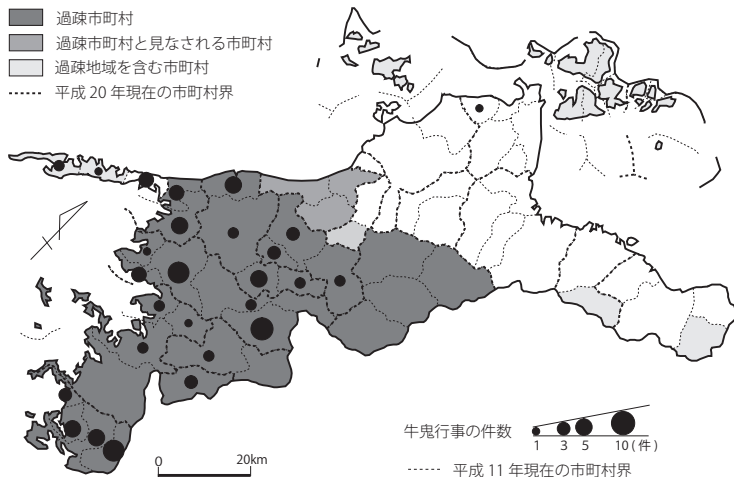


図1 愛媛県における牛鬼行事の分布と過疎地域の展開（平成期）  
 （愛媛県歴史文化博物館編『愛媛まつり紀行』愛媛県歴史文化博物館、2000年、および、全国過疎地域自立促進連盟ホームページをもとに作成）  
 （注）本図では、1999年現在の市町村を単位として愛媛県歴史文化博物館編（2000）から把握可能な98件の牛鬼行事の分布を示した。ただし宇和島地方には、それ以上の数の牛鬼行事が伝承されているものと考えられる。

鬼北町）下鍵山集落の牛鬼は「平らかな顔」・「五色の色紙の幣」を、<sup>⑦</sup>宇和島市保田集落の牛鬼（雌）は「大きな臀部」・「険しい表情」・「柿渋色の布」を外見上の特徴としている。<sup>⑧</sup>宇和島地方の人々は、牛鬼に施されたこれらの細かな特徴を「自集落の独自性を示し、自身と他集落とを識別するもの」として重要視する。宇和島地方では氏子が牛鬼の作製を担ってきたが、近年はその技術をもつ人材が減少し、他集落の特定の人物に牛鬼の修復・作製を依頼する風潮が高まっているという（後述）。

平成期の宇和島地方では牛鬼の作製技術の継承が困難になりつつあるが、さらに、その行事の担い手もまた過疎化・少子高齢化の影響で減少の一途をたどっている。たとえば、我々は全国過疎地域自立促進連盟が提示する統計資料から、平成期の愛媛県では宇和島地方を中心に過疎化が進んでいることを理解できる（図1参照）<sup>⑨</sup>。このような状況下において、宇和島地方の人々は少ない人手での巡行が可能なように、牛鬼の素

材を重量のある和紙・粘土から発泡スチロール・プラスチック・グラスファイバーなどの軽い素材へと変更する、あるいは牛鬼の寸法を小さくするなどして山車の軽量化を図ってきた。<sup>(11)</sup> また、宇和島市では市内の愛護会（町内子供会）や保育園に対し、同市最大の観光イベントである「うわしま牛鬼まつり」の子ども牛鬼パレードへの参加を呼びかけ、伝統文化の若年者層への定着を促している。<sup>(12)</sup> 伝統行事存続のために、民間・行政レベルで上記のような対策がなされてきたが、宇和島地方の祭礼は依然として慢性的な人手不足に悩んでおり、地域住民はこの問題について根本的な解決策を未だ見いだせていないままとなっている。<sup>(13)</sup>

以上記したように、平成期の宇和島地方の人々は人的資源・祭礼道具の確保というふたつの大きな課題を抱えながら、牛鬼行事の伝承を図っている。これとは対照的に、「祭礼道具」である牛鬼は祭礼以外の場でも重用されるようになり、その「活動空間」は著しく拡大していった。一九七〇年ころより、牛鬼はうわしま牛鬼まつりをはじめとする宇和島市や日本国内外の観光イベントに頻繁に登場するようになり、各地で人気を獲得していった（宇和島市誌編さん委員会編、二〇〇五）。これとほぼ同時に、宇和島地方の人々の間では、牛鬼をモチーフとした民具を「魔除け道具」として自宅や店舗に飾るという新たな風習が生じた。<sup>(14)</sup> つまり元来「伝統的な祭礼道具」であったはずの牛鬼は、「観光化（地域活性化）の象徴」・「日常的な魔除け道具」としての役割をも果たす「より身近で日常的な存在」へとその性質を変容させたと言える。

本章では、愛媛県宇和島地方の祭礼文化の地域的特性とその現況について簡潔に述べた。先述のように、同地方一帯では牛鬼行事の存続が危ぶまれているが、現地調査の結果、ひとつの農村集落―宇和島市保田集落―が周辺地域の牛鬼行事に人的資源・祭礼道具を提供し、これらの存続を促していることが明らかになった。次章では同集落の活動の概要と、これが周辺地域に及ぼした影響について報告を行うこととする。

### 三 「牛鬼文化圏」の維持―宇和島市保田集落を事例に―

宇和島市の中心市街地より約五キロメートル南に位置する保田集落は、水田に囲まれた人口一、八四二人（二〇〇九年現在）の農村集落で、近年、牛鬼行事の継承に関する活動を最も積極的に行っている地区のひとつである。同集落は、宇和島市の中でも高齢者率が最も低い（一六・八パーセント）番城地区に含まれ（宇和島市編、一九九七）、また一九七〇年以降は一、七〇〇人以上の人口を常に維持していることから、周辺地域に比べると「少子高齢化」「過疎化」という社会問題からは解放された地域のひとつだと捉えることができる。<sup>(14)</sup>

保田集落は宇和島市長堀に鎮座する三島神社の氏子集落のひとつである。三島神社では毎年一〇月三・一四日に例大祭（秋祭り）を斎行しており、この期間中、保田集落を含む同社の氏子区域（全二三集落）では牛鬼行事が行われる。<sup>(15)</sup> 図2に、二〇〇九年度の三島神社の例大祭における各氏子集落の役割を示した。この図から、三島神社の氏子は、秋季大祭時に全部で一八基もの牛鬼（子供牛鬼一六基、大人牛鬼二基）、そして二基の四ツ太鼓を用い、比較的規模の大きい山車の祭礼を行っていることがわかる。<sup>(16)</sup>

一〇月一四日の本祭りの際に、各氏子集落の牛鬼は三島神社に宮入りをするが、その前後に氏子世帯や店舗の玄関先で門付け（「悪魔祓い」）を行う。この「悪魔祓い」には災厄を振り祓う効果があるとされる。保田集落の牛鬼のみは、三島神社の御輿渡御の折に祭礼行列の先導役となり、巡路の露払いも担う。また同集落には、牛鬼のドンガラにひと握りの稲穂を巻きつけて五穀豊穡を祈願する風習があったという。以上の事実から、三島神社の氏子にとって牛鬼とは地域社会や祭礼空間の災厄を祓い、五穀豊穡をもたらしてくれる極めて重要な祭礼道具だと言える。

二〇〇九年現在、保田集落では男性を中心とした約八〇名で「保田牛鬼保存会」を組織している。同保存会では、

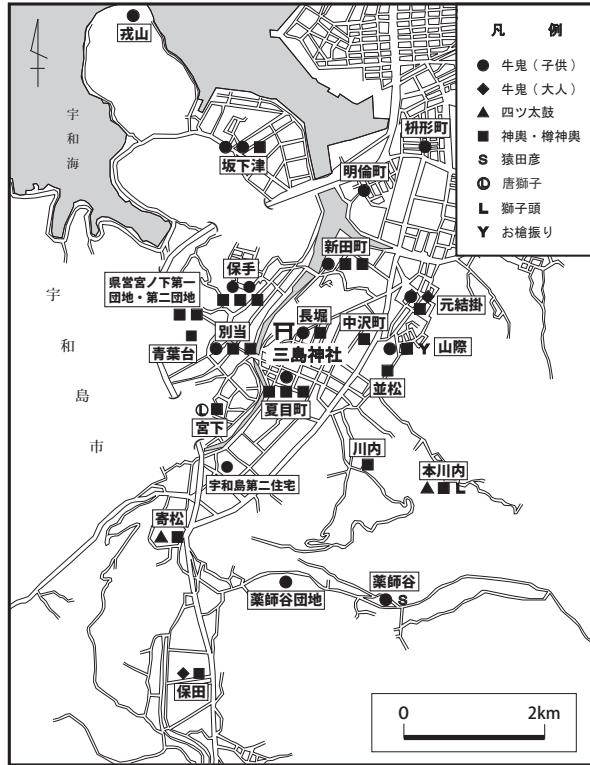


図2 愛媛県宇和島市三島神社の氏子集落と例大祭時における役割（2009年）

（愛媛県宇和島市三島神社に対する聞き取り調査、および同社資料をもとに作成）

三島神社の例大祭や観光イベントなどの機会に牛鬼の作製・巡行などを精力的に行い、自集落の祭礼文化の継承・活性化を図っている。現地調査の結果、保田牛鬼保存会は上記以外の活動—すなわち、周辺地域の牛鬼行事に対する人的資源・祭礼道具の提供—も行っていることが判明した。以下に、同保存会がこのような活動を展開するに至った経緯を記す。

一九七〇年代の保田集落では、牛鬼行事の担い手である中年男性が連続して亡くなるという不幸が発生した。これを受けて、同集落の人々は数年間にわたって牛鬼行事の実施を見合わせた。牛鬼行事は、保田集落の男性にとって「ストレス発散」のための、そして、集落の紐帯を維持・強化し、町内会組織の後継者を育成するための重要な機会となっていた。集落のある男性（後の保田牛鬼保存会初代会長）は、この「祭礼行事の途絶」という状況に危機感を抱き、「保田牛鬼保存会」を創設し、牛鬼行事を再興・活性化していくことの必要性を周囲に説いた。すると集落内の四三名の男性がこの呼びかけに賛同して活動資金を提供し、「保田

牛鬼保存会」はその活動を開始することとなった。<sup>(18)</sup>

当初、保田牛鬼保存会の活動の目的は自集落の牛鬼行事の再興・活性化にあったが、同保存会では牛鬼の巡行に必要な最低限の人員（男性約二〇名）すら確保できないという状態が続いていた。<sup>(19)</sup> このような事態が生じた背景には、当時の保田集落において、（a）他の信仰をもつ世帯が増加した、<sup>(20)</sup>（b）会社勤めの住民が急増し、平日に行われることとの多い牛鬼行事への参加者が減少した、（c）青年層が就業・教育の機会を求めて都市部へと転出した、（d）娯楽の多様化により、青年層が伝統行事への興味・関心を低下させていたなどの社会的事情があった。一九八〇年代以降、保田牛鬼保存会は人的資源を確保すべく、三島神社の例大祭の折に、宇和島市（和霊神社・伊吹八幡神社の氏子集落）・津島町（現宇和島市。津島神社の氏子集落）・松野町・日吉村（現鬼北町）・野村町（現西予市）・高知県梶原町から、それぞれ二〜一〇名程度の担ぎ手を招聘するようになった。これと並行して、保田牛鬼保存会では上記の地域で行われる山車行事（牛鬼・四ツ太鼓）に、応援として数名の人員（各二〜三名）を派遣し始めた（図3）。<sup>(21)</sup> 保田集落が周辺地域と人的資源の相互派遣を長期的に実施するようになった結果、同集落は牛鬼の担ぎ手不足に陥ることはなくなり、「現在（筆者注：二〇〇九年現在）、人手に関しては心配無用の状態」になっているという（保田牛鬼保存会会長に対する聞き取り調査による）。

保田集落が周辺地域と人的資源に関する協力体制を長期的に構築し得た理由とは何か。その要因として、保田集落と周辺地域が「牛鬼文化圏」に属し、双方の祭礼の儀礼構成・道具の構造に共通点が極めて多く、これらの住民がもう一方の祭礼の宗教的意味を理解し、かつ、祭礼道具（牛鬼・四ツ太鼓）の扱いに慣れていることから、お互いを「安心して任せられる相手」として認識し、信頼関係を円滑に構築し得た点を指摘できる。<sup>(22)</sup> さらに、保田集落がある程度の人口を維持しており、他地域に数名程度の「人手」を確実に供給し得たことや、同集落と周辺集落が物理的にある

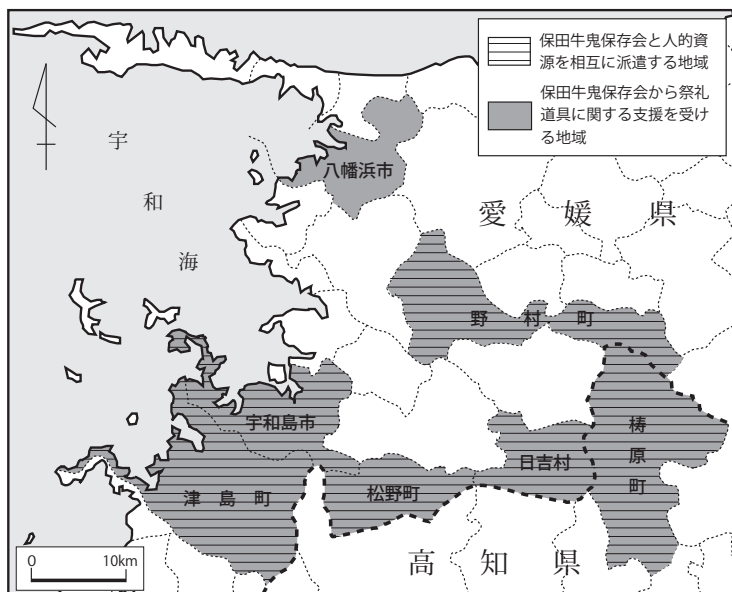


図3 宇和島市保田牛鬼保存会と周辺地域間における「人的資源」・「祭礼道具」の需給関係（2010年）

（保田牛鬼保存会に対する聞き取り調査により作成）

（注）本図の市町村界は、1999年現在のものである。

程度離れており、祭礼日が重複していないという<sup>(23)</sup>ことも重要な要因だと考えられる。

二〇〇〇年以降、保田牛鬼保存会では周辺地域の依頼に基づいて祭礼道具に関する支援活動、つまり牛鬼のカブヤドンガラの作製・修復も積極的に行うようになった<sup>(24)</sup>。宇和島地方の人々は、祭礼時に牛鬼を荒々しく担ぎあげたり、その頸部を上下・前後方向に激しく動かしたりする<sup>(25)</sup>。この時、牛鬼が建築物と接触し、その一部を損壊することが多々ある。牛鬼を損壊した場合は、翌年の祭礼前までに牛鬼を修復、あるいは新規に作製する必要がある。しかし平成期以降、同地方では牛鬼の作製技術をもつ人物が死亡や高齢などのために減少し、多くの集落がカブヤドンガラを独力で作製・修復できなくなった。このような集落の人々が保田牛鬼保存会に関する情報を偶然耳にし、同保存会に祭礼道具の作製・修復を依頼するようになったので

ある。<sup>(26)</sup> 保田牛鬼保存会によると、たとえば、二〇〇九年秋季～二〇一〇年夏季の約一年間に、八幡浜市・松野町・日吉町（現鬼北町）・野村町（現西予市）の住民からカブ六点の作製・修復依頼がなされたという。<sup>(27)</sup> また同保存会は津島町（現宇和島市）の住民の求めに応じて、彼らに技術指導をしながら牛鬼を共同で造りあげることも行った。<sup>(28)</sup> 保田牛鬼保存会では、他集落の牛鬼を作製・修復する場合、これらの伝統的な形態を可能な限り踏襲するよう配慮している。同保存会の人々は、自らが手がけた牛鬼が各地の祭礼や観光イベントに登場し、祭礼空間を賑わせることは「非常に誇らしいこと」で、これは保田集落全体を活性化させるカンフル剤になっていると考えている。

以上記したように、一九八〇年代以降、宇和島市保田集落は牛鬼行事の実施に不可欠な人的資源と祭礼道具の需給源として機能を果たすようになった。この結果、保田集落は自集落のみならず、周辺地域の牛鬼行事を存続させ、宇和島地方一帯に広がる「牛鬼文化圏」の継承を促すこととなった。我々はこの事例を手がかりとして、地域社会が「祭礼文化圏」を継承していくためのモデルを構築し得るのではなからうか。また、そのモデルを現実社会で適用する際に、いかなる問題が生じるのであろうか。次章では、これらの点について論じることとしたい。

#### 四 おわりに―「祭礼文化圏」の継承モデルの構築と適用のために―

本稿では、愛媛県宇和島市保田集落が行ってきた祭礼文化の継承に関する活動の概要と、これが周辺地域に及ぼした影響について、現地調査の成果をもとに報告を行った。一九七〇年代に保田集落の人々は牛鬼行事の途絶という出来事を経験し、以降、その再興・活性化のために保田牛鬼保存会を創設するとともに、周辺地域と人的資源に関する協力的体制を構築していった。さらに二〇〇〇年代に入ると、同保存会は周辺地域からの依頼に基づいて、これらの祭

礼道具の作製・修復も積極的に行うようになった。保田集落による一連の活動は自らの祭礼文化を維持・活性化させただけでなく、周辺地域の牛鬼行事の存続―換言するならば、宇和島地方一円に広がる「牛鬼文化圏」の維持―を促すものとなった。この事例のように、ある程度の人口を維持し、少子高齢化の進展が比較的緩やかであり、かつ、祭礼道具の作製技術をもつ集落が、同一の祭礼文化圏内の他の集落に対して人的資源や祭礼道具を供給する拠点（以下、これを「拠点集落」と記す）となれば、日本各地に展開する「祭礼文化圏」の継承は比較的容易なものとなるのではなからうか（図4）。

ただし、人的資源や祭礼道具に関する支援を求める集落（以下、これを「支援集落」と記載）が、図4に示したネットワークを実際に形成していくには、どこに拠点集落が存在するかをあらかじめ把握する必要がある。その有力な情報提供者となり得るのは、研究者と自治体である。この両者は次の作業（①～③）を通じて獲得した学術的情報を支援集落に提供することにより、日本各地の「祭礼文化圏」の維持に寄与できるものと思われる。その最初の作業とは、星野（二〇一二）などの先行研究も既に指摘していることだが、①日本全国の祭礼や伝統芸能に関する基礎的情報（祭礼関連の文書・画像記録も含む）を網羅的に収集し、こ

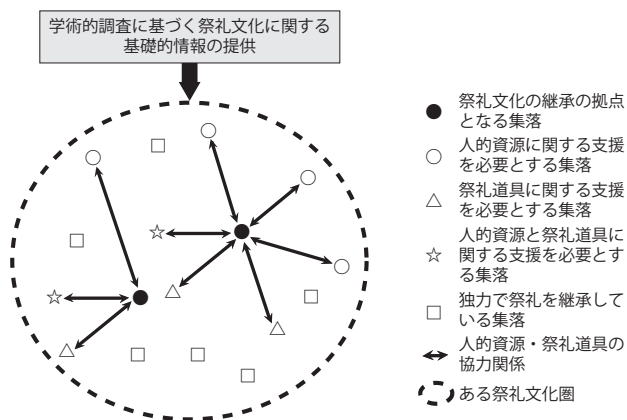


図4 祭礼文化圏の継承に関するモデル（概念図）

れをデータベース化することである。<sup>(20)</sup>次に両者が行うべき作業とは、すなわち、②①のデータベースをふまえ、「儀礼構成」・「祭礼道具」を指標として日本全国の祭礼を分類し、それぞれの「祭礼文化圏」を画定することである。そして最後に、③各祭礼文化圏内で現地調査を進め、拠点集落となり得る地区を選定し、さらに、これらに関する詳細な情報（集落名・人口規模・祭礼日・祭礼を行う神社の名前・祭礼に参加する氏子の属性・祭礼道具とその使用方法・祭礼道具の作製者と人数・連絡先など）を収集することが求められよう。以上の作業を経てはじめて、研究者と自治体は支援集落に対し、これらと「祭礼日が重複しない」・「類似した儀礼構成の祭礼を行う」・「同じ構造の祭礼道具を用いる」などの条件をもつ拠点集落―つまり「安心して任せられる相手」―に関する正確な情報を提供することが可能となる。

支援集落と拠点集落間で協力体制が成立した際に、研究者と自治体はもう一点だけ克服すべき課題を抱えることになる。それは、研究者と自治体が拠点集落に対し、可能な限り支援集落の「伝統」を踏襲して祭礼道具の作成・修復作業にあたるよう学術的な助言を行っていくことである。既に第二章で述べたように、現在の宇和島地方では他集落―とりわけ宇和島市内―の特定の人物に牛鬼の作製・修復を依頼する風潮が高まっている。その結果、宇和島地方の牛鬼の外見は「多様性に富んだ伝統的なもの」から、宇和島市周辺に伝わる「険しい表情とスマートな骨格が特徴的な宇和島型」へと徐々に変貌を遂げ、同地方各地の祭礼や観光イベントには多くの「宇和島型」の牛鬼が登場するようになった。筆者が聞き取り調査を行った地域住民の中には「非宇和島型」の牛鬼を用いてきた人物も存在する。彼は近年のこの風潮を「寂しいことだが、やむを得ないことだ」と容認する一方で、「伝統的な祭礼道具」を継承していくことの重要性についても述べ、その複雑な心境を垣間見せていた。

この聞き取り調査の成果から、我々は「画一化された祭礼道具」の提供が特定の祭礼文化圏の内部に「多数派」と「少

数派」という新たな社会的関係性を生み出すであろうこと、そして、これが過度に進展した場合、「少数派」に属する人々が「多数派」に対して脅威を感じ、自身の祭礼文化の継承に対する意欲を低下させるであろうことを十分に予測できる。よって、研究者・自治体は拠点集落に支援集落の祭礼道具に関する情報を提供し、「祭礼道具の多様性の保全」に努め、祭礼文化圏内における新たな社会的葛藤の発生を防止していくことが求められよう。

研究者・自治体などが以上記した課題を克服し、かつ、拠点集落が支援集落への人的資源・祭礼道具の供給源として長期的に機能し得たならば、そこを結節点としてひとつの「祭礼文化圏」は存続の可能性を高めていく。その結果、祭礼研究は地域活性化という意味において社会的貢献を果たし、「実学」としての一步を踏み出すこととなる。

謝辞 現地調査においては、愛媛県宇和島市の三島神社の越智重安氏と越智三和氏、保田牛鬼保存会の杉浦宏二会長をはじめとする三島神社の氏子の皆様、鬼北町日吉神社の氏子の皆様、ならびに九島地区の皆様からは多大なるご協力とご理解を賜りました。また、國學院大学の茂木栄教授、江戸川大学の阿南透教授、そして東京家政学院大学の西海賢二教授からは本研究について貴重なご助言をいただきました。文末ではございますが、以上の皆様に厚く御礼申し上げます。

## 注

- (1) 星野(二〇〇九・二〇一〇・二〇一一)に収録されたアンケート調査結果から、多くの地域社会が伝統芸能を存続させるための条件として、行政側からの支援(地域活性化)・人的資源の確保・祭礼道具の確保の三点を挙げていることがわかる。

- (2) 二〇〇九年一月三日～同一七日、二〇一〇年七月二二～二六日、二〇一一年五月三〇～三二日の三回にわたり、愛媛県宇和島地方において現地調査を行った。その際に、地域住民の多くが現在でも「平成の大合併」以前の地名に基づいて祭礼関係の活動を実施していることが判明した。よって、本稿でも「平成の大合併」以前（一九九九年現在）の地名を用いて論を進めることとした。
- (3) 大本（二〇〇五）によると、中予では神輿をぶつけ合う、獅子舞を奉納するなどの形態の祭礼が相対的に多く、山車の行事は少ない。
- (4) 愛媛県歴史文化博物館編（二〇〇〇）によると、牛鬼行事は宇和島地方と高知県の一部地域を含む約一五〇か所で伝承されてきたという。
- (5) 牛鬼の構造については、三好（二〇〇四）を参照。本稿で事例として取りあげた宇和島市保田集落では、ドンガラを組み立て作業に男性七名以上の人手を要するという。ちなみに、同集落では二〇一〇年六月中旬に牛鬼のドンガラ（一基）を一日で完成させている。
- (6) 宇和島市保田集落では、毎年、多数のカブを作製している（第三章参照）。大人用の牛鬼のカブ（縦一二〇センチメートル×横一〇六センチメートル）一点を完成させるのに、約一か月間を要するという。
- (7) 愛媛県日吉村（現鬼北町）の日吉神社の氏子に対する聞き取り調査による。
- (8) 宇和島地方の人々は、牛鬼の体型に関して「都会の牛鬼は細身で、田舎のものは太っている」という認識をもつ。
- (9) 全国過疎地域自立促進連盟ホームページの統計資料を参照。各都道府県における過疎地域を含む自治体数（過疎市町村みなし過疎市町村・過疎地域を含む市町村）の割合は、二〇〇八（平成二〇）年四月現在において島根県が九〇・五パーセントと最も高く、以下、大分県の八八・九パーセント、鹿児島県の八七・〇パーセント、愛媛県の八五・〇パーセントと続く。これらの中において、山車行事が最も盛んな地域は愛媛県である。
- (10) たとえば、愛媛県日吉村（現鬼北町）の日吉神社の氏子は、二〇一〇年時点で牛鬼一基を成人一四～一五名で担いでいるが、かつては三〇～四〇名以上の人手を要するほど大規模で重量のあるものを用いていたという（日吉神社の氏子に対する聞き取り調査による）。
- (11) 「うわじま牛鬼まつり」とは、和霊神社（宇和島市和霊町鎮座）の例大祭（七月二三・二四日）にあわせて開催される宇和島市最大の観光イベントである。この行事の一環として、宇和島市内の子供が小ぶりの牛鬼を担いで練り歩く「子

- ども牛鬼パレード」が行われる。なお、うわじま牛鬼まつり最大の目玉行事は、宇和島地方の各集落・企業による親牛鬼の巡行（「親牛鬼パレード」）である。二〇一〇年の場合、二〇団体が親牛鬼パレードに参加し、二一基の牛鬼がJR宇和島駅―商店街（きさいやロード）―和霊神社周辺を巡行した。以下に当時の参加団体を記す。宇和島市役所牛鬼保存会・丸穂牛鬼保存会・愛媛県南予地方局・（株）フジ フジグラン北宇和島・宇和島中央ライオンズクラブ・宇和島信用金庫・宇和島商工会議所青年部・新鮮組・元結掛発展会 牛鬼勇志会・津島牛鬼会・倉吉牛鬼会（鳥取県）・宇和島徳洲会病院・日吉一希を起こす会・鬼北牛鬼会・えひめ農業協同組合・三間町青年団・大浦青年団・野村青年団・全日本空輸株式会社・保田牛鬼保存会。うわじま牛鬼まつりについては、木下（二〇〇九）が詳細な報告を行っている。
- (12) たとえば、男児を牛鬼行事の伝統的な担い手としてきた宇和島市九島地区（島嶼部）においても、少子高齢化・過疎化が過度に進展している。二〇〇九年現在、九島地区の男児は島内の成人男性から支援を受けて、辛うじて牛鬼行事を継承している。島民の大部分は牛鬼行事の存続を切望しているが、そのための具体的な方策を未だ見いだせていないという（九島地区での聞き取り調査による）。
- (13) 三島神社（愛媛県宇和島市長堀鎮座）に対する聞き取り調査による。
- (14) 愛媛県宇和島市指定区別人口調による。宇和島市ホームページ参照。
- (15) 二〇〇九年現在における三島神社の氏子集落は、宇和島市杵形町・明倫町・新田町・元結掛・山際・並松・長堀・中沢町・川内・本川内・薬師谷・薬師谷団地・寄松・別当・保手・坂下津・戎山・県営団地・青葉台・宮下・夏目町・宇和島第二住宅・保田の二三集落である。
- (16) ただし、毎年、必ずしも全部の山車が祭礼に参加する訳ではない。山車の数は年によって若干異なるといふ（三島神社への聞き取り調査による）。
- (17) 保田集落では牛鬼を三〜四年周期で造り替える。それは、牛鬼の主要な素材がマダケや木材であるため、数年間で腐食や虫害が進み、使用困難な状態になるからである。
- (18) 保田牛鬼保存会の構成員は春と秋の年二回、一人あたり二、〇〇〇円の資金を提供し、これをもとに様々な活動を行ってきた。
- (19) 保田牛鬼保存会によると、この当時、牛鬼の担ぎ手が不足したために、人々は少人数で小さなサイズの牛鬼を巡行させるにとどめたという。

- (20) 一九七〇年代以降、保田集落の周辺地域に立正佼成会や創価学会などの他宗教の施設が進出し、その影響で、これらの崇敬者数は増加傾向にあるという。
- (21) 保田集落では、たとえば伊吹八幡神社の祭礼時には、四ツ太鼓巡行の応援要員として数名を派遣している。四ツ太鼓は牛鬼と同様に担いで移動させるタイプの山車で、これは三島神社の祭礼にも登場する。
- (22) 地域住民とその支援者である「第三者」の間に、祭礼の宗教的意味や祭礼道具について相互理解がなければ、両者間で清水(二〇一二)の論考にみられるようなトラブルが生じ、祭礼の継承は困難になるものと予測される。
- (23) たとえば、保田牛鬼保存会が人的資源を派遣している松野町と日吉町(現鬼北町)の集落では、毎年一月第二週目に秋季祭礼が行われている。
- (24) 保田牛鬼保存会では、会長がおもにカブを作製し、他の構成員たちは彼の指示に従いながらその補助やドンガラを組み立てなどの作業を行う。これらの作業は、本業の合間に行われる。
- (25) 牛鬼の頸部の操作には梶子の原理が用いられる。操作係がドンガラの内側に入り、そこで頸部用の木材の一端(T字型の箇所、第二章参照)に体重をかけてこれを下方に押し、その反対側(カブを据えた側)が垂直方向に持ち上がる。操作係が木材に加える力を減らすと、カブは垂直方向に下がる。なお、宇和島地方の牛鬼の中には頸部をカメのように前後に伸縮させるタイプのものも存在する。これは同地方の人々により、「カメウシ」と呼ばれる。
- (26) 宇和島地方の各種施設が保田牛鬼保存会に対し、展示用のカブの作製を依頼することが屢々ある。施設に展示されたカブを偶然目にした人々が、施設側に作製者について問い合わせをし、同保存会の存在と活動内容を把握する。そして彼らはこの情報に基づいて保田牛鬼保存会にコンタクトを取り、祭礼道具の作製・修復依頼を行うのだという。したがって、保田牛鬼保存会に関する情報は施設の訪問者の「口コミ」を通じて宇和島地方一帯に拡散したものと考えられる。
- (27) たとえば、八幡浜市のある集落は祭礼時に牛鬼の鼻の部分破損し、二〇〇九年に保田牛鬼保存会にその修復を依頼している。
- (28) うわじま牛鬼まつりの参加企業が保田牛鬼保存会に対し、牛鬼の作製を依頼することもある。
- (29) このような試みのひとつとして、星野(二〇一二)は日本全国の神楽(六五九件)に関するデータベース「神楽マップ」(全国神楽協議会ホームページ参照)を紹介している。現在、そのほかに「無形文化遺産の記録所在情報データベース」(公益財団法人伝統文化活性化国民協会ホームページ参照)などが公開されている。

## 参考文献・参考HP

- 宇和島市誌編さん委員会編『宇和島市誌 下巻』宇和島市、二〇〇五年。
- 宇和島市編『九島地区人口問題に関するレポート』宇和島市、一九九七年。
- 愛媛県歴史文化博物館編『愛媛まつり紀行』愛媛県歴史文化博物館、二〇〇〇年。
- 大本敬久「四国の山車祭礼」植木行宣・田井竜一編『都市の祭礼』岩田書院、三六五―三八九頁所収、二〇〇五年。
- 木下博民「八つ鹿踊りと牛鬼―お国自慢お練話―」創風社出版、二〇〇九年。
- 清水 純「神田祭―担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会―」『日本民俗学』二七二、一―三三頁、二〇一二年。
- 田村 華・上田祥史・菊地成朋「博多祇園山笠における町組織の持続と変質」『日本建築学会大会学術講演梗概集』E―二、三九九―四〇〇頁、二〇〇四年。
- 筒井 裕「日本の曳きものの祭礼にみられる東西の「コントラスト」」國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター編『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター、二二―二四〇頁所収、二〇一二年。
- 戸島信二「神楽文化と過疎問題―宮崎の自然が残した「癒し文化」を考える―」『地域文化研究』一、六三―六八頁、二〇〇六年。
- 藤岡和佳「島の祭り―観光―伝統の継承に見る外部の取り込み過程―」『日本文化環境論講座紀要』二、九一―一〇〇頁、二〇〇〇年。
- 星野 絃「村の伝統芸能が危ない」岩田書院、二〇〇九年。
- 星野 絃「過疎地の伝統芸能の再生を願って」国書刊行会、二〇一二年。
- 松平 誠「現代ニッポン祭り考―都市祭りの伝統を創る人びと―」小学館、一九九四年。
- 三好繁幸「牛鬼見て歩き聞き歩き」リポリア、二〇〇四年。
- 吉田竜司「伝統的祭礼の維持問題―岸和田だんじり祭における曳き手の周流と祭礼文化圏―」『龍谷大学社会学部紀要』三七、二〇一〇年。

[http://www.city.uwajima.chime.jp/www/contents/1129255743640/files/0903EBPR\\_SHITTEJINKO.pdf](http://www.city.uwajima.chime.jp/www/contents/1129255743640/files/0903EBPR_SHITTEJINKO.pdf) (宇和島市ホーム

ページ、指定区別人口調。最終確認日 二〇一二年八月二三日)

<http://www.mukeibunkaisan.jp/about.php> (公益財団法人伝統文化活性化国民協会ホームページ、無形文化遺産の記録所  
情報データベース。最終確認日 二〇一二年一〇月二三日)

<http://www.kagura.gr.jp/> (全国神楽協議会ホームページ、神楽マップ。最終確認日 二〇一二年一〇月二三日)

<http://www.kaso-net.or.jp/map/ehime.htm> (全国過疎地域自立促進連盟ホームページ。最終確認日 二〇一二年九月二二日)